

おおさか
KEY
ワード
第43回



地図：稲荷神社と神樹の場所

なにげない
日常に歴史を感じるとき

原風景として連なる
幟、そびえる神樹

空堀や谷町など、空襲をまぬがれた大阪の上町台地の近くに住んでいると、日常生活のなにげない機会に、季節の祭礼や行事など古い時代を偲ばせるものに出会うことが多い。新年早々は十日戎の宝恵駕籠がミナミの街を練り歩き、春の彼岸の雑踏や、夏は路地の奥へと提灯が連なる地蔵盆の幻想的な夕景に、自分が古い歴史ある都市の住民であることを実感させられる。大晦日には、中寺町や下寺町辺りに無数の除夜の鐘が交錯して豊かな音響空間が広がっている。

二月や三月ならば、街を歩いて遭遇する季節の風景の一つが、お稲荷さんの初午祭である。稲荷大明神は、農業や商売の神で、明治の神仏分離の下、神道では宇迦之御魂神など穀物・食物の神を主祭神とし、仏教では、狐に乗ると考えられた荼枳尼天と同一視され、豊川稲荷を代表とする寺院でも祭祀されている。狐はあくまでそのお使いなのである。

大阪の上町の範囲では、玉造稲荷神社^①、土佐稲荷神社^②、産湯稲荷神社^③、豊川稲荷大阪別院^④、難波神社の博労稲荷神社^⑤や高津宮の高倉稲荷神社^⑥などをはじめほうぼうに有名なお社があるほか、ビルの屋上や商店街の一隅、路地の奥をはじめ各所に祠が祀られている。四月に催されることもあるが、稲荷神社では、二月最初の午の日を初午とし「初午祭」が行われる（博労稲荷神社では4月）。祭は服部良一作曲「おおさかカンタータ」（1974年初演）にも歌われているが、私の家の近くにある路地も奥に祠が祀られているのであろう、季節になると路地の入口に幟が立ち、それを見るたびに、この一年のうつろいと大都市に残る庶民信仰の深さを再認識させられる。

もうひとつ、こどもの頃から私が親しんできたのが道路のまん中に残された神樹である。樹には巳さん（みい）を祀った祠があり、わが家の近くでは、谷町筋を東に入った「くすのき通り（周防町筋）」のまん中にある「楠木大神^⑦」や、長堀通りに面した石段に直木三十五の文学碑と並ぶ「榎木大明神^⑧」（中央区安堂寺町）が印象的である。街のランドマーク、地域に生まれ育った人たちの原風景の一つと言えようか。

「榎木大明神」は、樹齢はおよそ六百五十年と推定される槐（えんじゅ）という中国原産の木で、土地神として「白蛇大明神」の祠が祀られている。1988（昭和63）年、枯死寸前の状態になったとき、大阪市と地元の顕彰会「箔美会」の尽力によって樹医による延命治療がなされ、元気になった。万城目学の『プリンセス・トヨトミ』にも登場する。春のお彼岸前後に大祭が挙行され、祠を囲んで石段に沿って吊られた提灯が灯る景色が美しく、初午祭の幟と同様に、歴史ある都市に住む幸せを実感するのである。

大阪は金銭にドライな商工業都市というように外部の人は思いがちだが、実はいまでも、庶民に支えられた信仰の街なのではないか。五木寛之も著書『宗教都市・大阪 前衛都市・京都』（2005年）で大阪を「宗教都市」と論じ、中沢新一の『大阪アースダイバー』（2012年）も、宗教学者の視点から斬新に大阪論を展開している。

街に住む楽しみは、買い物が便利だとか、社会的ステータスとかいう類の問題ではない。日常生活のうちに、自分が歴史や昔の人たちの心と結びついていることを感じさせられることにあるのではなかろうか。